

# 楽しんで書く子どもを育てる作文指導のあり方

～体験と書くことの交互活動のあり方の工夫（低学年を中心に）～

所属機関 筑後市教育研究所

所属校 下妻小学校

職・氏名 教諭 下川 暁子

## 1 主題設定の理由

### (1) 児童の実態から

本学級の子どもたちは、一年生一学期の学習で、少しずつ言葉のおもしろさを感じ始めている。しかし、いろいろな出会いがあっても「このことを誰かに伝えたい。」「書いてみたい。」という強い思いまでにはならず、「おもしろかった。」「楽しかった。」で終わっていることが多い。また、口頭作文では全員が2文の文が言える。しかし、文字であらわすとすると、自分の思いをすらすらと何文も書ける子どももいるが、ほとんどが一文がやっとかける程度である。書くことに、かなりの抵抗がある理由として、ひらがなをすらすら書けないということもあるが、「体験したことを書きたい」という必要感を持つまでにいたっていないということが考えられる。

このような実態から、もっと相手や目的を考え、書くことの事柄を集めて、事柄の順序を考えながら、書くことを楽しみ、親しみを持って書く子どもを育てることを求めて本主題を設定した。

このことは、「体験は言語化され、経験として蓄積されてはじめて体験の意義を十分に生かすことができる。」という言葉と体験の関係から考えても意義深いと考える。

### (2) 現代社会の要請から

変化の激しい社会の中で、今、子どもの心やコミュニケーションの有様が大きな問題となっている。心豊かに生きていくためには、まず、人間同士が、意思の疎通を図り、それぞれが分かり合うためには、自分の思いや願いをき

ちんと表現し、相手に理解してもらうことが必要である。これからの学校教育では、その基盤となる力を育てていくことが求められている。

その基礎となる力が、国語科における表現力と理解力である。「適切に表現する能力」と「正確に理解する能力」とは、交互に表裏一体的な関係として、連続的かつ同時に機能し、自分の考えを自分の言葉で積極的に表現する力や態度を育てる。表現する力の中でも特に、机に向かい、落ち着いて考え紙面に自分の思いをぶつける活動、つまり「書く」という活動こそが、現代の子どもたちの心を育て、豊かなコミュニケーション能力を育てる源になると考える。

何のために書くのか、誰に向かって書くのか、どんな内容を書くのかを明確にもたせて、自分の思いをかける子どもを育てたい。そこで、本主題を設定し、子どもに、何をどのように書くか具体的な手順・手だてを示して指導していき、自分の思いを文に表現し、相手に理解してもらうことのできる力を育てていきたい。

## 2 主題の意味

### 楽しんで書くとは

楽しんで書くとは、相手や目的を考えながら自分の伝えたいことを見つけ、それを文に表して伝え、相手に伝わった喜びを味わい、書くことができた満足感や充実感を味わっていることである。

### 楽しんで書いている子どもの姿

体験したことから、「伝えたい！」という思いを持つ子ども

(目的をもつ子ども)

体験事象の中から、自分の伝えたいことをはっきり見つけている子ども

(対象を感受する子ども)

相手に伝えたいことを文にあらわすことのできる子ども

(文を作ることのできる子ども)

自分の伝えたいことを自分の言葉で表し、相手に伝わった喜びを味わっている子ども

(文作りの喜びを味わっている子ども)

### 3 副主題の意味

体験と書くことの交互活動とは、楽しんで書くことができるような状況を設定する体験の場と、体験に基づく実感を生かして書く活動とを繰り返し行う活動である。そのために、体験と書くことを結びつけることが必要である。具体的には次の三つを考える。

身の回りにあるもの、体験したものから、「これを書きたい！」と思わせるための題材作りを行う。

書く段階で、書く力を伸ばすために、書く方法の支援を行う。

ア「見つけて書く」ことを繰り返す「見て書く」作文

「見て書く」とは、書く題材を決めたら、何度も繰り返し「どこが、どうなっているか」を見ることにより、主語に目を向けて一文を増やしていく活動である。

イ「しながら書く」ことを繰り返す「して書く」作文

「して書く」とは、実際にしながら書くことにより、書く場面を区切り、順序良く書くことにより、述語に目を向けて一文を増やしていく活動である。

ウ劇で会話したことを思い出し、会話の必要な文を書く作文

相手から返事が返ってくる、伝え合い作

### 文の体験

自己表現をして伝える作文とは次のような流れで書くことができる考える。

- ・ 書くことをもつ。
- ・ 一文作りをする
- ・ 清書する。
- ・ 読み返す。
- ・ 書いたことを伝える。

### 4 研究の目標

楽しんで書く子どもを育てるために、体験と書くことの交互活動のあり方を究明する。

### 5 研究の仮説

体験と書くことの交互活動の場を設定し、題材づくりと書くことの支援をすれば、文を楽しんで書く子どもが育つであろう。

### 6 研究の内容

楽しんで書くために、「書きたい！」と思わせるための場づくりと題材づくり  
楽しんで書くための体験の場づくりと文作りの支援

「見て書く」体験の場づくりと文作り

「して書く」体験の場づくりと文作り

「話したことを書く」会話文の入った文作り

楽しんで書くために、相手に伝え返事をもらい、さらに書きたいという意欲を持たせるための場作り

### 7 研究の構想図(略)

### 8 研究の実際と考察

**実践授業** 「見て書く」、「見て書く」を繰り返しながら、主語に目を向けて一文を増やす実践

(1) 単元 よく見てかこう

「しらせたいな、見せたいな」

(2) 単元構成 《略》

(3) 指導の実際

《であう段階》 題材作りの工夫  
ねらい

お家の人に「ニワトリのことをよく見てしらせる」というめあてを持って書くことができるようにする。

指導の実際

まず、袋に入れた卵（学校のニワトリが産んだもの）を提示し、何だろうと興味を持たせ、ニワトリは毎日見ているが、知らないことがいっぱいあることに気づかせ、このニワトリのことをくわしく見て、家の人に教えようという目的意識・相手意識をもたせた。鳥小屋には三羽のニワトリがいるのでその中から、書きたい一羽を決めた。

《つくる段階》 一文作りの工夫  
ねらい

鳥小屋に何度も足を運び、いろいろな部位や特徴をじっくり見て、一文を書くことができるようにする。

鳥小屋に行ってニワトリの絵を描く。

「どこがどんなだ」「どこがどうなっている」という一文作りをさせた。

約束として、「( )は( )です。

と一枚の紙に一文を書くこと」「同じことを書かないこと」の2つを決めた。

書きためた文を観点をもとに整理し、頭・羽・足などの観点1（部位）に気づいていった。その後、自分の文にシール（観点シール）頭（赤）・羽（黄）・足

（青）を貼り、自分がどの観  
点で書  
いてい



たのか（写真1 観点シール貼り）を明らかにしていった。

さらに、児童の文例から、動きの観点（観点2）に気づかせ、（緑）のシールを貼り、足りないシール（観点）が

わかったら、また鳥小屋に行き、ニワトリをよく見て、書き加えていった。

（成果）

シールを使って書いたので、自分に足りないものは何か明らかにすることができ、観点を増やすことができた。

実践授業 「して書く」、「して書く」  
を繰り返し、書く順序に気づき、述語  
に目を向けて一文を増やす実践

(1)単元 しながらかこう

「どんぐりゴマづくり」

(2)単元構成 《略》

(3)指導の実際

《であう段階》 題材作りの工夫

生活科での「あき見つけ」教材と関連させ、文作りを行った。

《つくる・いかす段階》

一文作りの工夫

ねらい

どんぐりゴマ作りを4つの場面  
にわけ、それぞれで、つくってみて、  
したとおりを文に書くことができ  
るようにする。

指導の実際

ア用意する  
ものを確認  
し文に書  
く。



（写真2 用意するもの）

緑の用紙を準備し、一枚に一文書く。  
二文になるときは二枚目に書かせる。  
黒板に板書し、書けない児童は、写  
していいこととする。

イ作り方を黄色の紙に書く。

ウ実際に作ってみて、できたら青の紙  
にした通りの事を書く。

エしばらく遊んだあと、遊んだとおりに  
赤の紙に書く。思ったことなども  
書くことにする。

オ四枚の紙を順につないで清書する。

（成果）

4つの場面を設定して実際に「やっ  
てみて書く」事をしたので全員の児童が一

文以上書くことができた。

### 実践授業 劇の役で話したことを思い出し、「 」のあった文を書く実践

- (1)単元 思い出してかこう  
「いいこといっぱい、一年生」
- (2)単元構成 《指導案別紙》
- (3)指導の実際  
ねらい

おうちの人に、「大きなかぶ」で何の役をしたか、どんなことを言ったかを伝えるために書くことができる。

#### 指導の実際

ア何の役をしたか、文に書く。(白用紙)  
イわたしが言ったことを「 」を使ってかこう。(青用紙)

(ここで、会話文の書き方の指導)  
ウ気持ちや思いを赤の用紙に書く。



(写真3 色用紙に書く)

工書いたら読み直す。

#### (成果)

実際に話したことを思い出す事で、会話のあった文を書くことができた。

### 実践授業 相手から返事が返ってくる、伝え合いの作文

- (1)単元 第2学年 書いて知らせ、返事をもらおう「かんさつ名人になろう」
- (2)単元構成 《指導案別紙》
- (3)指導の実際  
ねらい

自分で育てた野菜について作文を書き、3年生に知らせ、返事をもらおう。

#### 指導の実際

ア自分の野菜について観察して見つけた文をためる。

イ文を、観点(大きさ・色・形・数)にわけると。

ウ自分の文にない観点到気づき新たに文を書く。

エ4つの色のカード(観点)が全部そろった文を書く。

オ書いた文を読み直す。

#### (成果)

三年生から返事をもらい、さらにまた知らせたいという気持ちを持つことができた。また、三年生からも、今度は僕たちも書いて知らせたいという声があった。

## 9 研究のまとめ

### (1)研究の成果

低学年における、作文指導の研究を進めてきたが、よく見ていながら書こう(往復活動)・よくしていながら書こう(場面の切り取り)・会話したことを思い出して会話文の必要な作文を書こう・相手から返事が返ってくる作文を書こうなどの手だてをとれば、どの児童も最後まで、楽しく自分の思いを持って作文を書くことができることがわかった。

つまり、体験と書くことの交互活動を仕組み、その上に立って、「見て書く」「して書く」「会話して書く」「伝えて返事をもらう」などの場を設定し、観点シール・色用紙などの手立てを仕組みれば作文はかけるのである。

題材作りにあたっては、どんな題材と出会わせるか。本当に書きたい題材になっているか(意欲) 文作りにつながる題材か(技能)が条件となり、そのために、他教科・行事との関連・相手・目的をはっきりさせるなどの手立てを講じれば、楽しんで書く子どもを育てることができると考える。

### (2)今後の課題

低学年の作文指導において、二年間の目標をどこで何を抑えていくのか具体的に明らかにして、二年間を見通した指導をしていく必要があると考える。また、検証方法に科学性を持たせ、全部の子どもが見えるように、尺度、観点を持って数値化しながら、評価を続けていきたい。